

KSKQ

出会い
ふれあい
助け合い



VOL.266

サロン あべの

〈サロン・あべの〉7月の出会い

梅雨も明けた快晴の7月19日
(土)午後1時〜4時、育徳コ
ミュニティーセンター研修室に

子どもの命を守る 児童養護施設の取り組み

鳴海賢三(写真次頁)さんをお迎え
し、「子どもの命を守る―児童
養護施設の取り組み」と題して
お話しをしていただきました。

自己紹介

私はこの3月まで、家庭の事

情で親といっしょに暮らせない
子どもたちが生活する児童養護
施設で、35年間働いていまし
た。今日は、子どもたちがどの

ように施設に入所し、育ち、社
会に出て生きているかというこ
とと、地域の子育て支援として
やってきた電話相談を通じた、
親と子どもを守る実践について
お話ししたいと思います。

電話相談から

私が勤めていた池島寮では24
時間365日「子どもの悩みな
んでも相談」をしていました。

そこに寄せられた相談です。

○ 「イライラして子どもを叩い
てしまう。叩いてから『なんて
ことをしたのか』と思つてとて
も辛い。母親としての自信がな
い」。悩みをだれにも打ち明け

られず不安や絶望を感じていま
した。私はとにかく話を聞き、

気持ちに共感し、励ましながらア
ドバイスをします。「気が楽に
なつた」と相談が終わりました。

○

「いつも顔に青あざのある子ど
もがいる」と匿名の電話があり
ました。学校に連絡すると1週
間後に他の保護者からも相談が
あつたと返事がありました。児
童相談所に連絡をとりましたが年
末年始のため、主任児童委員さ
んに見守ってもらうことにしまし
た。電話相談のチラシを学校で
配ってもらっていたので、通告
してもらえたケースでした。

○

「近所の子がかくまつてほし
いと来ている」。母親にせつか
んされ家に帰りたくないという
話です。学校でも子どもの問題
は知っていましたが、その背景
にある家庭の状況は聞いていま
せんでした。児童相談所で一時



ことができ、高校

育所から電話相談を受け児童相談所につないだ家庭でした。心の相談室をしている主任児童委員さんにも支援してもらい、学校全体で見守りました。進路相談のときに本人が母親に「私を叩かないでほしい」と話す

裁判の記録から―虐待という犯罪

いまお話しした事例は私たちとは違う世界の話だと思われるかも知れませんが、電話相談や入所してくる子どもの状況を見ると、決して特殊なケースではないのです。育兒雑誌の調査で子どもをかかわいく思えないときがある人は72%、虐待をする母親の気持ちが変わると答えた人は52%、虐待をしているのでは

保護し、子どもは施設入所を希望していましたが、話し合いの結果、子どもも母親も自分の行動を振り返り、家に帰ることになりました。

○ 「夫の暴力で子どもと逃げて

いる」。サラ金や心中未遂などの問題もある緊急を要するケースなので出向いて面接しました。別の区にアパートを借りて母親は仕事をし、子どもは学校

にも行けていません。生活費も底を突いたので福祉事務所母子生活支援施設への入所をお願いしましたがダメとのことでした。しかし、虐待ケースとして再度協議し、入所できることになりました。

○

「お父さんに叩かれている。先生に相談しても何もしてくれない」。中学生からの電話です。調べると以前に下の子の保

にも合格できました。

○

私の施設がある区で2人の子どもが虐待死したと新聞で報道され驚きました。実は近所の人から電話相談を受けて児童相談所に通告したケースでしたので、非常に辛い思いをしました。子どもが亡くなったときは虐待が明確でなかったため捜査が打ち切りになっていましたが、岸和田の虐待事件がきっかけとなって児童虐待防止法が改正され、再度捜査して発覚した事件でした。

子どもを裸で雪に埋めて写真撮影し、その後死に至らしめた事件など、虐待に関する裁判の話をしようと思いましたが、しんどくなるので今日はやめます。裁判の記録を読んでいると痛々しくなり、「人間とはなにか」と感じてしまいます。乳児院やケースワーカーの関わりがあつたケースでも、深刻な事件が起こつたのです。

育兒雑誌の調査から―誰にも起こり得る虐待の可能性

いまお話しした事例は私たちとは違う世界の話だと思われるかも知れませんが、電話相談や入所してくる子どもの状況を見ると、決して特殊なケースではないのです。育兒雑誌の調査で子どもをかかわいく思えないときがある人は72%、虐待をする母親の気持ちが変わると答えた人は52%、虐待をしているのでは

ないかと思うときがある人も33%でした。まとめてみると86%の人が虐待のグレーゾーンにいるのです。同じ調査で96%の人は子どもを産んでよかったと答えていますが、同時にしんどさを感じています。これが現代の孤立した母親たちの心なのです。

児童虐待防止法ができてから子育て支援のネットワークなどが増えて、問題を早期に発見し、対応・支援できるようになったので、虐待の不安を感じる人は少しずつ減っています。しかし、子どもを育てることに不安をもつ若い人は多く、安心できるような支える社会にしないと子どもは救えないと感じています。

虐待に関する統計から

去年は全国の児童虐待相談件数が4万件を超えました。平成15年からの3年間で虐待死と判

断された児童は295人にのぼります。格差社会のなかで子どもや親たちの心にいろいろな問題が起こっており、家族で支えることもできなくなっています。学校でも子どもや家庭の問題を受け止められていないのではないかと思います。大阪市の統計では平成18年には788件の虐待に関する相談があり、阿倍野区は28件でした。区によっていろいろな問題がありますので、実情にあわせた相談体制やネットワークが必要だと思っています。

児童養護施設の子どもたち―虐待を受けた子への取り組み

池島寮は7〜8割の子どもが

虐待を受けて入所してきますので、子どもの気持ちや家族の問題をきちんとみながら援助しています。4歳で入所してきた日、ユキちゃんは不安で泣き叫びました。高校生のカヨちゃん

にあやされて泣き止みました。職員が抱っこできるまで1週間、私は1か月もかかりました。ユキちゃんはお母さんの精神的な病気のために十分な愛情を受けることができていません。そして虐待が起こって入所してきました。途中でお母さんと分離する状態を愛情剥奪障害といいます。最初から愛情が受けられなかった愛着形成障害などときちんと区別をしないと治療ができません。ユキちゃんは私の家にも遊びに来ます。施設でもいろいろ楽しいイベントをしています。それは別に個別的な関わりをつくりたいと思います。退職後もボランティアをしたいと思っています。

エミちゃんは生まれたときからお母さんと生活していません。タカシくんは虐待のトラウマを抱えています。この子たちは夜中に泣いて起きてきますので、夜勤のときは横で寝て見守

ります。それは施設職員にとって自分の仕事を確認するうえで大事なことだと思っています。

児童養護施設に入ってくる幼児で発達が気になる子どもが多くなってきました。カッチャンはみんなと遊ぶことができません。いまは何をする時間なのか、なかなか理解できません。小学校で授業を受けるのは困難と診断され、情緒短期治療施設に移りました。精神科で「見捨てられ不安」と診断されたトッチャンは、寝て2時間後に必ず起きて廊下を走り回って暴れます。集団のなかに入ることを恐怖に感じるので幼稚園にも登園できませんでしたが、お母さんとの関係を築くよう支援し、学校に通えるようになりました。シユンちゃんはとにかく衝動的・多動で目が離せません。押し入れの天袋の上って何度けがをしても懲りません。カンちゃんは自閉症の疑いがあります。

児童養護施設の支援のなかで治療がたいへん重要になっているのです。

小学5年生のムツちゃんは一緒に入所した弟がぐずるのを見ると蹴ったり叩いたりします。勉強していてもわからなくてイライラすると暴れます。かんしゃくを注意すると睨みつけ、泣き叫んで飛び出していきま

安になり、児童相談所で高校に行かないと施設には入れないと

言われて一所懸命勉強したこと

ちをしつかり受け止めて、あたたかい気持ちで守ってほしいと思います。

池島寮にはこのようにとても

試験を受けるときにも出て不合格になりました。でもミキさんは寮を出てひとり暮らしをする

ことになりました。そのときミキさんがくれた手紙には「寮に来てみんなに愛され、幸せです。自信もつきました」と書かれていました。その後ミキさんは就職しました。ミスをすることもあり死にたいと思うときには、話を聞いてあげています。

「ムツちゃんは虐待を受けた子どもだと思うので、私たちが話を聞いてあげてもいい？」と聞いてくれました。ミキさんとナミさんは自分たちの辛い経験を話し、ムツちゃんの話聞きまし

た。ムツちゃんの話したことがすべて本当かどうかわかりませんが、悲しみや苦しみを抱いて

自傷行為、自殺企画、パニック、摂食障害、うつなどの症状

そのミキさんが電話をくれました。成人式には出られないけど、貯めたお金で晴れ着を着て写真を撮りたい。一緒に撮ってください」と。そして「この写真ができたなら親に見てもらおうと思う」と言いました。いよいよこの子が親から自立する時期がきたのだと思いました。

「お父さんのことを考えると殴りたくなる」。ミキさんが自分も虐待を受けて死にたいと思っていたこと、中学を卒業する前に不

安になり、児童相談所で高校に行かないと施設には入れないと

高学年のミキさんが池島寮にいた3年間は、自分の深く傷ついた心を癒す期間でした。身体

も成人式を迎え、お祝いにごちそうしてあげると言う「先生

の先生や友達も地域の人も、こういう子どもたちの気持ち

ができません。施設職員、学校の先生や友達も地域の人も、

先生

たい」と答えました。家人と一緒に大きなオムレツをつくり、おいしいと言って全部食べました。そして「お母さんが私を産んだ歳に近づいたので、会ってこようと思う」と言って帰っていききました。施設を出て行った子どもたちは、親から自立して自分自身の力で生きていきます。私はずっと応援していききたいと思っています。

池島寮は大阪市立盲学校寄宿舎の人たちと交流しています。その成人祭にミキさんがこんな内容のメッセージを届けました。「二十歳になり、社会の動きを知らない」と、思ってニュースを見るようにしました。児童虐待の報道があり心が痛みました。ケースワーカーの数が少ないので、大丈夫と判断された子は後回しにされていることも知り、私はこの子たちのために何かできないかと思いました。寮で生活していたときに

小さな子に接して『保育園の先生に向いている』と言われたことを思い出しました。子どもの変化に気がつく保育士になりたという夢を実現するために受験勉強をされていて、今はとても充実しています。みなさんも夢が実現できるよう、お互い頑張っていきましょう」。

が、思いをもって社会で生きていくことはすばらしいことだと思います。施設で働くことの意味は、こうした子どもたちと喜びや悲しみを共感し合いながら、自分の人生と重ね合わせて生きていくことだと思っています。限られた紙面のなかで書ききれませんが、鳴海先生のお話のな

かの、子どもたちの「本当の言葉」が心に突き刺さっている。死にたいと思うほどの辛い気持ちで生きている子どもたちが私たちの地域にもいるという現実を、もつとみんなで受け止め、子どもたちの心と命を守るために、社会の問題として取り組んでいかなければと痛感しました。

(参加者21名 原田 仁)

お知らせ

<サロン・あべの>9月の出会い

内 容…「在日フィリピン」のお母さんと
慕われて

お客さま…藤崎スーザンさん
(英語及びタガログ語通訳)

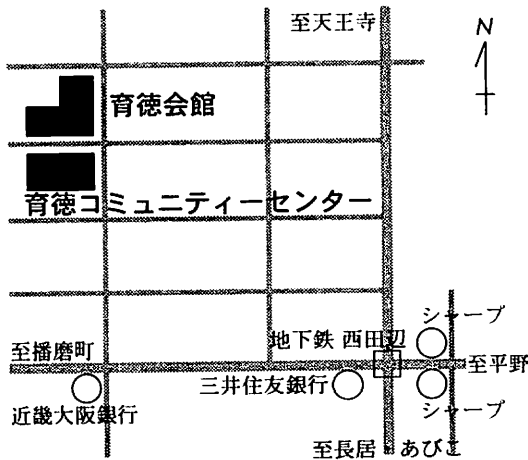
日 時…9月20日(土)午後1時～4時

場 所…育徳コミュニティーセンター2階
研修室(スロープ・車いすトイレ有)
大阪市阿倍野区阪南町5-15-28
TEL 06-6621-1901
最寄り駅= 地下鉄御堂筋線「西田辺」(駅構内にエレベーター有)下車すぐ

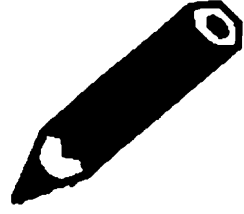
会 費…なし

問い合わせ先…

TEL 06-6691-1028 (富田慶子)



47



邦子、 ..ん歳の手習い。

障害者自立生活運動の広がり

夫は、1987年の夏から1年間のアメリカ留学中に障害者の自立について、多くのことを学びました。そして、その自立について次のように話しています。

「昔のような身の回りのことが自分でできるといふこととか、職業的自活が自立であるという考えではなくて、身の回りのことが自分でできなくても、職業的に自活していなくても、重い障害をもつ人は、自分の人生を自

分で決定して、自分のライフスタイルをつくって、自分で選択していくことが、それだけでも大切な自立なのです。その考え方は、古い自立観を破って、特に重い障害者の人間の尊厳というか、その大切さを訴えています。今までは、障害者は保護される対象であったのに対して、保護されるのではなく、自分の人生を自分の生活の主体者として生きる保障が必要とされます」

アメリカは州によって、政策も変わりますが、障害者自立生活運動の発祥地といわれるパークレー市のあるカリフォルニア州では、夫によれば、重い障害者の地域自立生活を権利として保障しているということですが、夫は、介護を公的に保障し、介護を受益権利として保障しているということに大変感動しました。それはもう20年前のことです。から、公的介護保障などは、当時の日本では、少なくとも私たち夫婦にとつては夢物語のようなものでした。

夫は、「介護を親に頼るとか、ボランティアに頼るのはおかしい。しかも、それを人権



<サロン・あべの>の活動資金調達にご協力ください。

として保障するという、その考え方でですね。それが自己決定を可能にし、そのことが、同時に成人になれば、親・家族から独立していくことが自立であるという考え方と結びついていくんです」と話しています。しかし、自立の主要素である自己決定が多く制約されている重度心身障害者側からは、自己決定が自立であると考えるのには限界があるという反論が常にありました。

夫は、留学から帰ってきて、西宮市の重度心身障害者通所施設「青葉園」の園長から、

「あなたの話は、身体障害者とか自己決定能力のある人には当てはまるけど、自己決定能力の制約されている心身障害者にとつての自立とはどういうことか」と言われました。その後、夫は、その難問に悩み続けましたが、「その人達の生活をその人達の親亡き後も地域の生活の主体者として尊重されるような地域社会づくりが大事な課題だと僕は思います」と話しています。そして、夫は、青葉園の最も重度な心身障害者の地域自立生活の取り組みに、研究会などを通して関与していきましたが、そこでの実践研究を定年後のライフ・ワークとして取り組みたいと考えていたようです。

自己決定による自立が、重度の身体障害者だけでなく、知的障害者にも、精神障害者にも、必要な援助を受けながら広がっていく地域社会を夫は思い描いていました。それは、積極的に依存しながらも、障害者が生活主体者となつて生きるということも自立であるということを受容する地域社会づくりでもあったのではないかと思われます。現在、青葉園をはじめ障害者と関係者の努力により、徐々にその自立の考えは広がりがつつあるようです。

(定藤邦子)

晴れのち晴れ-119-

稲垣恵雄

□五感

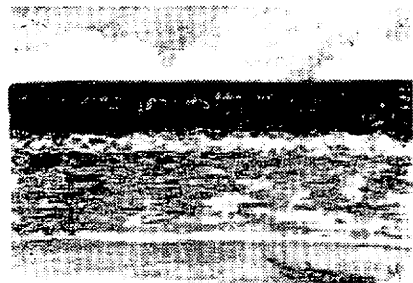
どんな生物でも五感はあると思う。五感とは視覚(みる)、聴覚(きく)、嗅覚(におう)、味覚(あじわう)、触覚(ふれる)の五つの感覚のことである。誰でもそうかも知れないが、私も加齢とともに五感が衰えてきている。

どの感覚が機能しなくなっても不自由で不便だが、特に視覚、いわゆる眼が見えなくなると生活に支障をきたすことが多い。だから視覚障害者の人は何かとご苦労が多いと思う。でも目が見えない代わりに他の感覚は晴眼者以上に敏感なものをもっておられる。それに私はたくさんの視覚障害者の人を知っているが、どの人も自分の障害に負けずにいっしょうけんめいがんばっておられるのである。私はこういう人たちに

会うと、いつも励まされ教えられている。

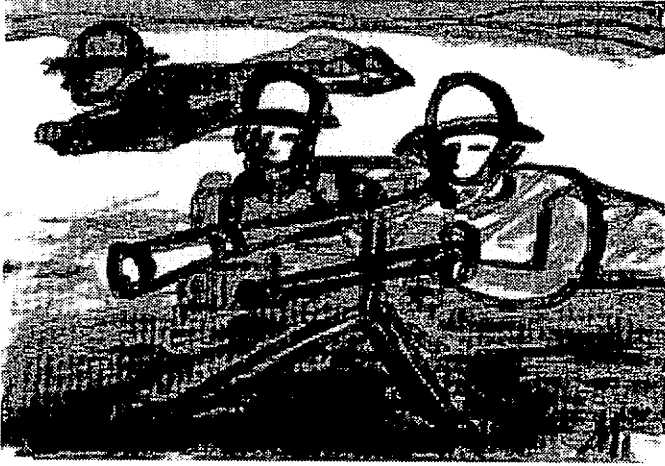
ところで先日新聞に日本画家の千住博氏がこんなことを書いておられた。「五感で感じるこの意味、それはまさに私たちが生きていくということなのだ。この生きていくという感覚を失ったらどうなるのか。それは死の意味も分からなくなってしまうということなのだ。そんなやりきれない犯罪があとをたたないのではないか」

私はこの千住博氏の一文を読んで「生まれることと死ぬことは別のもではなく同じである」と某氏の言われたことを思い出した。そして改めて五感というものを通して、生命の尊さや生きるこの意味を心に深く刻みつけた次第である。



複雑で皮肉な不幸

夏になると終戦記念日が近づき、「戦争の記憶を風化させない」という趣旨らしいドラマやテレビ番組が多く企画されていることに気づく。そこに前提となっているものは、戦争を体験した人は戦争の悲惨さを知っている。



その体験を若い人々に伝えていくことが戦争の再発を防ぐという考え方である。

それは一面では正しいのだろうが、最も賢明な考え方であるとは限らない。火事にあつた人が体験したその恐怖を聞き、それを再現したドラマを見ることだけで火事を防げるものでもないからである。

いや、それよりも「戦争の記憶の風化」というかぎり「戦争が記憶されている」という前提があるのだが、それさえも疑って良いのではと思う。たしかに、爆弾の記憶や、おびただしい死体を見た記憶はあるのだろうか、戦争がどのように始まり、なぜ止められなかったのかという「記憶」はほとんどの人に無いはずなのである。

そんなことを思い始めたのは、ここ数ヶ月ほど日本の戦争をめぐる歴史についての本を読んできたからだ。政府の公文書公開にはルールがあり、外国には五十年後に公開という五十年ルール、七十年後、百年後に公開という文書もあるという。そして五十年ルール

好評のエッセイ

岡 知史著

知らされない
愛について

700円

ほんの少しの
神に近い部分

700円

に従って公開された公文書のなかには、当然、五十年間秘密にしておくことが必要であると判断されたほどの重要な事実が含まれており、現在、その文書を分析することによって新しい第二次世界大戦像が歴史家によって作られつつある。そのいくつかは、テレビドラマや映画で描かれている戦争とは大きく異なっていて、現在の多くの日本人には受け入れがたいものであると思う。

さらに、七十年後、百年後に初めて公開される文書もあるというのだから、先の大戦についての事実も、あと四十年たたなければ明かされ

Latin American Concert Cantata

ラテンアメリカンコンサート
カンタータ

南米音楽(フォルクローレなど)のみならず、メキシコ音楽やフラメンコまで幅広くノリのよい演奏をお届けします。日頃、生で聞くことのできないラテンアメリカのコンサートです。

出 演 者 = Amankay (アマンカイ)

日 時 = 10月26日(日)
午後2時~3時半

会 場 = 大阪市立
住吉人権文化センター

定 員 = 申込先着350名(無料)
申 込 = 直接来館、電話、ファクス、ハガキ、もしくはメールに講座番号・講座名・郵便番号・住所・名前・年齢・電話番号を明記

申 込 先 = 大阪市立
住吉人権文化センター

〒558-0054

大阪市住吉区帝塚山東5-3-21

TEL 06-6674-3731

FAX 06-6674-3710

メールアドレス:

bunkac-koza@sumiyoshi.or.jp

ないこともあるわけだ。とすれば、戦争のある部分は記憶されているどころか、隠され、また隠されていることすら忘れられている。その意味では戦争の記憶は風化するどころか、記憶にすらのぼつていないと言えるだろう。

歴史は、特に近現代の戦争に関する一部分は意図的に隠されてきたのである。外交的な配慮や自国の利益保全のために封印されてきた事柄が非常に多くある。外交に関する非公開の公文書だけがそうした状況を作り出しているのではなく、関係者の利益を著しく損なう危険性があ

るために公にできないこともあるだろう。

高校時代に歴史の時間で学んだ教科書や三十年前の大学生のころに読んでいた本とまるで違うことを書いてある歴史書に接するたびに、私は真実に近づいたという喜びを感じる。とともに、自分が騙されていたような気分にもなる。

結局、私がいま何冊かの歴史の本から学んだことは、戦争は実に複雑で皮肉な不幸だということだ。複雑とは、たとえば、誰が善、誰が悪だと簡単に決めつけることもできず、

すべての原因を政治家や軍人に求めることもできないことである。皮肉なこととは、たとえば、戦争を避けたいという気持ちがかえって大きな戦争を招き、貧しい人々に希望を与えたいという思いが戦争を拡大させたということである。

では、どうすれば良いかという簡単な答えは見つかりそうにない。国民の一人一人が自分の考えを深め、安易な結論で満足することなく、複雑な状況に向かい合う覚悟を決めることこそ大切なものかもしれない。(知)

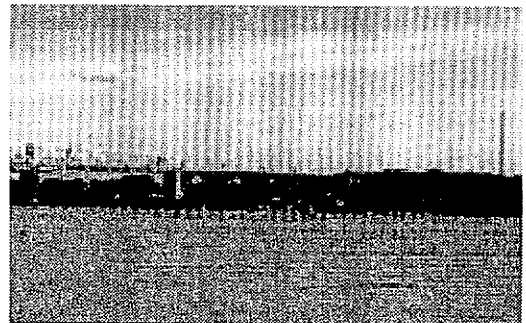
Mai スウェーデン 留学記 23

デンマークの第2の家族

2005年8月、スウェーデンからわざわざデンマークに向かった私の目的は、実は、私のデンマーク人の家族に会うためでした。

2000年大学1年生だった私が気の進まないままデンマーク研修に参加し、2泊3日のホームステイ体験・・・私を迎えに来てくれたのは、当時、大学生だったお姉さん、お兄さん、そして優しくて面白いお父さんの3人でした。共通言語は英語。でもその頃の私は、英語の楽しさを忘れかけていた頃で、自分の意思を伝えることにさえ一苦労。そんな

私を家族として受け入れてくれたのは、今は退職していましたが、船長のお父さん、高齢者センターのクッキングスタッフのお母さん、コペンハーゲン大学でポルトガル語を勉強しているお姉さん、オーフス大学でインド史を勉強していたお兄さん



第2の家族・ホストファミリーが住む街・ミドルファート（デンマークの真ん中の島、フュン島のユトランド半島に近い場所にある海辺の町です。対岸に見えるのがユトランド半島。橋を渡ればすぐです）

んの4人でした。2泊3日とはいえ、彼らと話すことにドキマギしていた私に、みんな私が話すのをよく聞いてくれ、安心させてくれたのでした。車でユトランド半島の浜辺まで連れて行ってくれたり、お母さんの美味しい手作りデーニッシュ・パンをいただいたり、私が福祉を勉強していることを知ったお母さんが自分の高齢者センターのキッチンや施設を見せてくれたりして、こんなに温かく優しくしてもらって、こんなに嬉しかったことはありませんでした。



私の第2の家族。お父さんとお母さん。

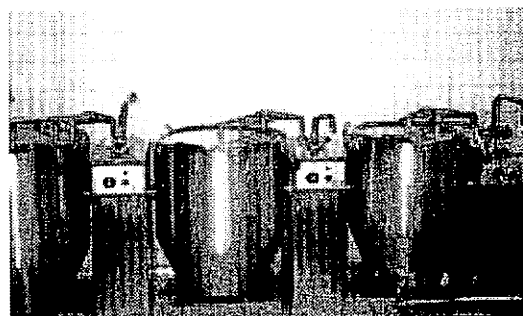
帰国後、お父さんとメールや手紙のやり取りをはじめ、私の誕生日には必ずパースデー・メールが届きました。私が決意したこと、「絶対英語をもっと話せるようになる!」ということでした。だから、オーストラリアでの英語の研修にも参加して、ある程度までマスターすると同時に、人と会話することの楽しさを改めて感じる事ができたのでした。大学1年生の時の出会いから、毎年のようにデンマークに行つては、このとき出会った家族に会って、その家庭で過ごしていま



デンマークの高齢者センター
(ホストマザーが働いていた高齢者センター)



高齢者センターの食堂(ゆったりとしています)



高齢者センターのキッチン
(ホストマザーはこのキッチンのスタッフで、毎朝早く出かけ、お昼ごろに戻ってきます。大きな鍋で料理を作っていて、在宅高齢者にも料理を届けています)

夏の終わりを楽しむ人たちがカフェはいっぱいでした。全然観光客のいない街で、日本人の私はとても目立ち、たまにお父さんの友人に会うと必ず声をかけられます。そんなとき、とても自慢そうに私を紹介してくれるお父さんが大好きです。一緒に買い物に出かけたり、ピクニックに出かけたり・・・なぜかこの年は、

した。残念ながら、お兄さんとお姉さんには、最初の時以来会っていません。大学の勉強や旅行に行っていたりで、普段は家にはいないのです。いつもお父さんから、お姉さんたちの近況を聞かされてきました。お父さんとお母さんはまるで娘が帰ってきたように、喜んでくれ、すでに家族の一員のようになっていました。最初は英語をあまり話せなかったお母さん。それなのに会うたびに英語がどんどん上手になっていたので、驚かされました。

そんな家族だから、当然のようにスウェーデンに行ったときも、会いに行くつもりでした。でもお父さんは違う。だからいつもお父さんに英語を教わらなかつたの。でもお父さんは違う。だからいつもお父さんに英語を教わらなかつたの。でもお父さんは違う。だからいつもお父さんに英語を教わらなかつたの。

た。お父さんに古いお城に連れて行ってもらいたい、のんびりとアイスクリームを食べ、お母さんの美味しい夕食の後、海辺のカフェに行つて、夕日を見ながらコーヒを飲む・・・



ピクニック (デンマーク・ボーゲンセの海岸にて。大量発生したテントウムシが飛び交う中のピクニック。ホストマザーと)

テントウムシが大発生しており、大量のテントウムシが飛ぶ中、サンドイッチを食べるのは、さすがに気持ち悪かったのですが。楽しい時間はあつという間に過ぎます。お別れの時、お母さんが2つの物を私に渡してくれました。1つは黄色のバラの鉢植え。そしてもう1つは、「もうすぐ誕生日でしょ。これはプレゼントなんだけど、誕生日が来るまで開けてはダメ。誕生日の朝に開けなさい」ということで、何が何だかわからないまま、でもその気持ちがすごく嬉しくて、言葉にならず、デンマーク語の「ありがとう」・・・「タック（実はスウェーデン語もデンマーク語も綴りは違っても発音が同じです）」を言うのが精いっぱいでした。ただ、せっかくだいたいたバラですが、スウェーデンに連れて帰るのは荷物も多く、そして私が第1ちゃん世話できるのかわからないので、知りあいにあげて代わりに育ててもらうことにしました。あのバラは今でも元気に咲いているでしょうか？

さて、もう1つのプレゼント。スウェーデン・ヴェクショー大学での生活が始まった2日後が私の誕生日。ワクワクしながらきれいに包装あるプレゼントを開けてみました。中

身はとても素敵なデンマークのガラス工芸品、ガラスの小物入れ。こんなに嬉しかった誕生日はありませんでした。

バラにしる、小物入れにしる、これから送るスウェーデンでの生活をすごく心配してくれていたお母さんとお父さんの2人からの気遣いでした。自分の国、日本を離れ、家族とも長い間離れて生活をしないといけない・・・私としてはちよつぱり嬉しかったのですが、デンマークのお父さんとお母さんは、私を気遣ってくれて、寮生活がさびしくないようにバラを、小物入れをくれたのだと思うと心が温かくなりました。黄色のバラは幸せの象徴・・・それがお母さんの思いが詰まっているものだったのです。まだ寮ではみんな学生が到着したばかりで知り合いもいなくて、誰にもパーティーで祝ってもらえないときでしたので（スウェーデンでは、誕生日パーティーは、自分から呼びかけて、準備も自分でしないとダメ）、こんなに嬉しいプレゼントはありませんでした。

「家族を大切にすること」・・・スウェーデンにしるデンマークにしる、他のヨーロッパの国にしる、みんな自分の家族関係を大切にしています。お互いをとても気遣っている

という印象を受けます。電話も毎日している友達も結構いましたし、「大切にするのは当たり前だろ。離れていたら親だって心配するし」と言われたこともあり。逆に私を含めて日本人が本当に家族を大切にしているのか疑問に思えてきてなりません。おそらくシャイな日本人は気持ちを直接伝えるという事は、まだまだ苦手なだけだと思いますが。血は全然繋がっていないのに私には本当の家族のような家族がデンマークにいるのです。こんな素敵な家族に出会えたことに感謝すると同時に、私は幸せだとつくづく思っています。

実は、この2005年を境に私はデンマークに行っていません。帰国間際は忙しく、デンマークまで寄ることができず、断念。2007年、2008年は結局日本を飛び出せず・・・クリスマスカードにこう書いていました。「早く帰っておいで。いつものお部屋は開けてあるよ」って。2009年こそ、絶対会いたいと思っています。今年もまた私の誕生日が近づいてきます・・・お父さん、お母さん、月日が経つのはあつという間で、出会ってから8年経っていますが、私は少し成長したでしょうか？

(清原 舞)

美智子のこんな話

岸田美智子

住吉区アクションプラン高齢・障害者報告
プレゼンテーションに参加しました

7月はず、定例会の前日に行われた地域福祉アクションプラン推進ボランティア事業(以下ボランティア事業)でのプレゼンテーションの報告がありました。当日の報告時間は全体で7分、質問時間7分でした。この発表時間7分の中で岸田が「トイレ貸します運動」をなぜ始めたのか? どのような目的があるのかなどを、約1分で話さなければならなかったのです。事前にしゃべりたい内容をプリントに持っています。読んで読むつもりで行ったのですが、いざ本番になるとそんなムードではなく、結局2〜3分くらいになったかと思いますが、かなり慌てた発表になりました。

このボランティア事業で、私のような当事者がしゃべるようなことはなかったようで、その発表時間の設定には問題があったと思いました。この事は事務局を通じて大阪市に伝えてくれることになりました。

今後のスタンプリーの進行予定ですが、10月に行われる区民祭りでスタンプリートを配ったり、学校の児童にも配る予定です。PR方法としてはトイレ貸します運動の協力施設97箇所にピラやポスターを置く、町内会の回覧板で回す、各団体のニュースにピラを掲載してもらう、ことになりました。

スタンプリーの期間は11月5日〜30日くらいまでの予定です。スタンプは3つ以上集めると景品と交換できることになり、この景品は、参加してのお楽しみ! ということで・・・。

そして、11月9日には前回「まいど」から提案した介助体験ツアーの案を持ち込み、車いす体験ツアーを行うことになりました。このツアーには、住吉区のシンボルキャラクターの「すみちゃん」のぬいぐるみも登場します。どんなツアーになるのか、コースは今後考えていく予定です。

ありがとうございます。

カンパ、はがき・お茶菓子・切手・バザー用品のご寄贈、また、サロングッズのお買い上げなど、ありがとうございました。

カスタネット、セルフ社、網谷保子、伊勢村和子、井上礼子、樹(うえき) 静子、大原みつ子、岡賀寿子、奥田久子、奥田真祐美、風智恵子、神谷君栄、茅原聖治、蔵田公子、小西京子、近藤千枝子、下村実幸、杉山葛枝、瀬尾洋美、大丸久美子、高尾澄男、高橋幸子、竹村定子、玉置明美、辻本浩江、手島八重子、中村宣子、中村久子、難波りんご、西和子、日本リウマチ友の会大阪支部、丸山寿美子、道川内喜美子・博子、南元子、宮崎喜代子、八木千代、山田茂子、山元洋子、山根匡子、山村貴司・久子、山本敏子、吉原和郎、和田保子、その他の方々。(敬称略)

童謡♪絵はがき

■5枚1組 ¥180



9月はどこのサロンの、
どのテーマが
お気に入りですか。
いい出会いしませんか。

■「サロン・にし」9月の出会い

日 時：9月13日（土）午後2時～4時
内 容：車いすに触れてみよう！
場 所：西区民センター（地下鉄西長堀駅下車・中
央図書館隣）
会 費：なし
問い合わせ先：関口 ☎090-4281-5641

■「サロン淀川」9月の出会い

日 時：9月6日（日）午後12時30分～5時
内 容：淀川区民まつりで、暑さを吹き飛ばせ
～今年はボランティアコーナーを設けま
す。焼きソバ、手作りおもちゃなど、楽し
いイベントを楽しんでください～
手作りおもちゃは市民フォーラム大阪協
同事業に参加しています。

場 所：淀川区民ランド、淀川区社協
ふれ愛コーナー
大阪市淀川区野中南2-1-5

会 費：なし
問い合わせ先：淀川区社協〒532-0005 淀川区三国
本町2-14-3 ☎06-6394-2900
E-mail：sorajii@iris.eonet.ne.jp

■「サロン・にしよど」9月の出会い

日 時：9月27日（土）
内 容：未定
問い合わせ先：中本 ☎090-9864-9678

■「ウイズ東淀川」9月の出会い

日 時：未定
内 容：未定
会 費：なし
問い合わせ先：鈴木昭二
☎06-6340-3082
FAX06-6340-3012

■「サロンいたみ」9月の出会いはお休みです

寄りみち



■童謡♪絵はがき・1年生になったら。昭和41年NHKテレビの「うたのえほん」で発表されてからずいぶん経ちますが、今なお卒業式でこの歌が歌われたり、3月になると子供服売り場からこの曲が聞こえてきます。詞の「ともだち ひやくにん できるかな」というフレーズは、「10人」では少なすぎ、「千人」では多すぎる。1年生になる子どもにとって現実感のある数字が「百」なのでしょう。「ふじさんのうえ」→「にっぽんじゅう」→「せかいじゅう」と、つぎつぎ大きく広がっていく世界。「ぱっくん」「どっしん」「わっはは」というリズムカルな言葉も子ども心をはずませるのでしょう。おおらかでユーモラスな歌です。（石）

<サロン・あべの>VOL.266 発行：平成20（2008）年8月16日 定価¥100
編集人：<サロン・あべの>運営委員会 表題：中西利香・筆 文中イラスト：石田美禰子
事務局：〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26 富田慶子方<サロン・あべの>
TEL・FAX 06-6691-1028 郵便振替口座：サロン・あべの 00950-9-26941
印刷：セルフ社 〒546-0044 東住吉区北田辺町4-23-2 ミスターDビル2F TEL06-6719-8212
ホームページ：http://pweb.sophia.ac.jp/oka/salon/「サロン あべの」でも検索できます